

地域教材と知識の構造図を用いた社会科授業づくり

— 小学校における社会科授業構成研究（1）—

池野範男・金 寶美・福井 駿

(2012年10月2日受理)

The Strategy for Teaching and Learning Social Studies using Teaching Materials in
Community and Structure of Knowledge

— A study on construction of the unit in primary social studies —

Norio Ikeno, Bo-Mi Kim and Suguru Fukui

Abstract: The aim of this paper is to pick up three primary schools as representatives of studying the construction of social studies lessons by school teachers, to analyze a view of social studies education, the unit of primary social studies and a lesson and to abstract the principles from the unit and its lesson. In this paper we analyze the unit and its lessons of social studies in three primary schools; Akebono primary school in Fukuyama city, Hiroshima prefecture, Michinoue primary school in Fukuyama city, and Akasaka primary school in Fukuoka city, Fukuoka prefecture. At first in this paper we take up the social studies in Akebono primary school using teaching materials in community and structure of knowledge.

Key words: Primary School, Social Studies, Strategy for Teaching and Learning, Teaching Materials, Structure of Knowledge

キーワード：小学校，社会科，授業づくり，地域教材，知識の構造

0 問題の所在

本稿の目的は、小学校の教育現場で実際になされている社会科授業構成に関する研究の代表的なものを取り上げ、社会科授業構成に関する研究にはどのようなものがあるかを解明し、小学校教育現場における社会科授業づくりの類型を示し、現場からの社会科授業改革の現状を明らかにすることである。

社会科授業構成研究には大別すると、2つのものがある。第一は、理論研究としての社会科授業構成研究である。それは森分（1978, 1984）に代表される研究である。授業づくりの基礎原理として理解主義、問題解決主義、認識主義、説明主義を措定し、それぞれにおいて、事例に基づき理論的に授業づくりの原理を抽出し、比較検討することでその優劣を明らかにするも

のである。第二は、社会科教師個々人、あるいは個々の小学校における社会科授業構成の研究である。長岡文雄、有田和正、あるいは、静岡市立安東小学校、富山市立堀川小学校の社会科授業づくり研究である。たとえば、安東小学校の場合には、学校自身の説明（1988）、社会科授業を記録しコメントしたもの（藤岡編、1990）、解説し説明したもの（武藤、1989）がある。これらは、1つの小学校の社会科授業を記録し分析し説明したものである。確かにこれらの個別研究は、必要な研究であろうが、それは、記述研究であり、「個に迫る」という特定の立場から小学校社会科授業の在り方を追求したものであり、多様な立場や考えを総括し、体系的に説明したものとはいえない。

本研究で取り扱おうとしているのは、理論研究ではなく、教育現場で開発されている個別研究である。そ

れもいくつかのタイプを見つけ、それぞれにおける社会科授業構成における原理と特質を解明し、現在、小学校における社会科授業構成として現実になされ、可能なものを明確にし、それぞれの到達点と課題を究明するとともに、相互の関連を付けようとするものである。いわゆる教育現場における社会科授業構成の現実的可能性を探求しようとするものである。

このようなねらいを設定するのは、2つの理由からである。第一は、理論研究と実践研究の間がかけ離れており、その溝を埋めることこそが今求められているからである。理論研究はモデル指導案づくりを、実践研究は指導案や実践の紹介をそれぞれしており、相互の関連、とりわけ、教育現場からの視点から見た社会科授業改革を検討することがおそろかになっていたのではないだろうか。これまでの社会科教育研究をレビューした研究書（全国社会科教育学会、2001）でも、社会科授業理論と小学校社会科授業研究と分けられており、相関的に考察することがなされておらず、理論と実践との結合という教育研究の要請を社会科教育研究においても一歩でも進めることが必要であると考えられるからである。

第二は、主義主張にとらわれず、学校現場の教師集団が地道に社会科授業づくりに取り組み、現実の社会科教育の課題に答えを出そうとするそのなかこそ、教育研究の進展があるとみなしているからである。理論研究は確かに、教育の進む方向への羅針盤にはなっている。しかし、その理論は現実に使われないと、何の役にも立たないものである。教育現場において生きて働いている理論を社会科授業づくりの中からくみ取り、その理論がどのように把握され実際に運用されているのかという点こそ、究明が待たれているものである。

本研究はこの意味で、小学校教育現場における社会科授業構成の理論と実際を、社会科教育観、単元計画、本時指導案に即して検討することで究明しようとするものである。

1 研究の方法と分析対象

(1) 研究の方法

社会科授業づくり、授業構成の研究は上述したように、これまで、理論研究と個別実践研究に分離していた。本研究では、その中間にある学校現場における授業づくり、開発研究に焦点化し、教育現場における可能性の持った授業づくり研究を追跡し、その中に潜む現実的可能性を引き出し、社会科授業理論と授業づくりの実際を接合しうるアリーナを設営できるようにし

たい。そうすることで、社会科教育研究者と実践者が相互に議論する場所が確保できるからである。

小学校教育現場における実際的な社会科授業づくりの中から、代表的なものと考えられる授業づくりを取り上げ、その授業づくりに示されている社会科授業構成の理論と方法を抽出し、原理と特質、またその課題を究明する。

その方法は、長年培ってきた授業づくりの方略が明らかになる学校を選択し、基本方略、単元計画、本時指導案の分析を通して、どのような方略で持って、日々の社会科授業においてどのような教育課題があると考え、その課題をどのように解決しようとしているのか、それはどのような社会科授業づくりとして現れてくるのかを、解明することにした。

(2) 研究対象の選定

本研究で取り上げる小学校は、次の3校である。

- ① 福山市立曙小学校
- ② (旧神辺町立) 福山市立道上小学校
- ③ 福岡市立赤坂小学校

これらの3校は長年、社会科教育研究をつづけ、独自の方法を持って進めてきた。

① 曙小学校は、地域教材を取り入れ、子どもたちにとって身近な学習材にすることで、学習に刺激を与え活発にするようにしている。また知識の構造図を持ち込み、1つの単元の内容を構造化し、より高いレベルの学習になるように努めている。

② 道上小学校も地域教材を取り入れているが、その特質は、考える場面における問いと活動の設定に工夫を施し、常に問い続けるようにしくむところにある。

③ 赤坂小学校は子どもたちが意見を出し合うとともに、聴き合う活動にし、異なった意見を出し合い、検討する場面を必ず1時間に1つ作り、議論するように仕組む。それは教師がおぜん立てをしてさえも、異なった意見を出し合い議論をする場面を作り、自分の意見を述べることができる子どもを育てることに力点を置いている。

3校は、社会科授業づくりにおいて異なった方略を取っている。曙小学校は知識の構造図を持ち込み、社会科学習の質の高さを保証することをめざし、道上小学校は、社会科において考え続けることを保証することをめざす。赤坂小学校は、常に社会に関して異なる意見を考えだし議論し、自らの意見を示すことができることを保証しようとしている。これら3校は、教育現場における社会科授業づくりの最前線にいると判断し、分析対象にした。(当然、このほかにも特色、特質のある学校はありうるだろうと思われるが、実際に授業を見たり、指導者にインタビューしたり、資料を

収集したりできたものから選び取ったので、本研究ではとりあえず、この3校に焦点化した。)

(3) 福山市立曙小学校

2003(平成15)年、広島県小学校社会科教育研究大会を開催することになったことがきっかけで、本格的な社会科授業研究をはじめた。当初から、地域素材の教材化、集団思考の取り入れ、問題解決的な学習の展開をねらいにして進めてきた。問題解決的な学習を進める中で、授業の初めよりも終わりにはより高いレベルの知識・理解、思考・判断に至るためにはどうすればよいかという課題に直面し、当時広島県教育委員会、また広島県立教育センターで推奨しようとされていた知識の構造図を取り入れ、質の高いレベルでの学習を作り出すことをめざす社会科授業づくりを開始することになった。知識の構造図とは、一つの単元で獲得することが期待される知識を、「具体から抽象へ」あるいは「事実から概念へ」とピラミッド型に表したものである。

2005(平成17)年度から各教師はそれぞれの単元で、知識・理解を個別に学習するのではなく、まとまりをもって、また、問いに導かれながら学習するという基本的な考えを採用して、各単元を知識と問いの構造化を試み、授業づくりを進めている。

本稿の以下では、3年と5年の単元を事例にして、社会科授業づくりをどのように進めているのか、またその基本原理と特質、課題はどのようなものかを明らかにしたい。

2 3年単元「くらしをささえるまちではたらくひとびと」の場合

(1) 単元の目標と課題

小学校学習指導要領が述べる3・4年社会科の主な目的は身近な地域そのものに対する愛情や関心を促進させることである。地域を素材として行われる観察や調査などの活動はこの目的を実現する手段であるとともに、5・6年社会科を準備する意味合いが強い(文部科学省)。

しかし、曙小学校の場合には、3年の社会科でも地域の教育資源を有効に活用することで「社会的な見方や考え方」の習得を目指した授業を組織している。曙小学校では、社会科における思考力・判断力・表現力の育成のため、地域の教育資源を有効に活用し授業を組織することで社会的な見方や考え方の習得を目指している。そのために注目しているのが、問題解決的な学習であり、曙小学校の社会科の核心は知識の構造図など、3つの工夫によって構成されている。

本単元の目標は社会科において地域で学んだことを日常につなげる「思考」の育成である。この目標において地域は「対象」と「方法」の2つの側面を取り扱われる。地域は、子ども自身の生活に関係しているところとして理解し、その一員としての自覚を持たせるための対象とともに、子どもが調査・観察・表現などを行う方法的側面のフィールドとしても取り扱われる。そのため、単元の内容としては学習活動の中で子どもが「観察・理解」を進めるため地域を取り扱う。そして、単元の方法として学習対象を調べ考える中で自分の考えを書き、根拠と立場を明らかにして自分の考えを説明することを推進している。

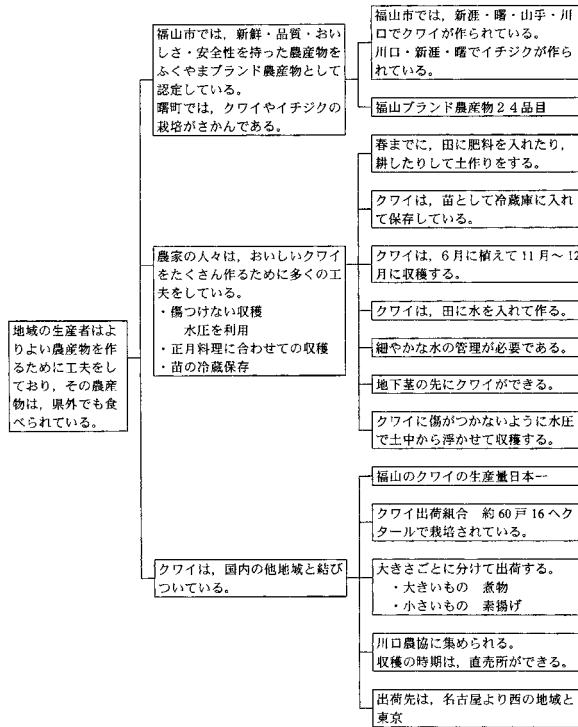
曙小学校(2011:1-2)は「豊かな知識の上に、深まりのある思考がなりたつ」という教育観を持っている。そのために、3つの工夫を準備する。3つとは、「知識の構造図」「より適切な地域教材」「集団思考」である。

「知識の構造図」は学習指導要領や教科書を土台に単元の内容を構造化し中心概念(概念)を把握するように作られている。学習の流れに応じて子どもの思考がもっと活発になるように準備されたものが「地域教材」と「集団思考」である。別言すれば、曙小学校では「知識の構造図」は、単元全体に渡る理解・思考のための知識や問いの枠として計画されるものであり、授業の過程で子どもの観察・理解を深める素材は地域教材、思考し自分の言葉で説明することを促進する方法は会話・対話を通じた集団思考である。これら3つの要素を中心に、3年単元「くらしをささえるまちではたらくひとびと」(曙小学校, 2011)を事例に挙げ曙小学校の工夫を探ってみたい。

(2) 知識の構造図とその役割

知識の構造図は、問題を見つけることから解決するまでの過程における子どもの理解を促進するため、単元の中心概念(概念)を段階化(階層化)したものである。子どもは授業を通じて身近な事実認識からはじめ、いろんな様子を類似なものごとにカテゴリ化し、1つの命題にまとめる過程になっている。授業過程で、子どもは徐々に思考を深めるのである。これは、社会科授業における「観察・理解/思考/説明」の原理の中の、ある1つのものに立脚する地域学習計画ではない。むしろ、各類型の特徴を単元の全体計画で適切に応用している。

3年のこの単元は、まず子どもの日常生活で見ているクワイの様子を利用し、観察と理解を促進させる。そのような事実が「現在の曙町におけるクワイの様子—その様子が現れるまでの手続きや人々の努力—クワイを通じる人々のつながり」とまとめられる。その過程の中で投げかける問いは、子どもが自分の意見を



資料1 単元「くらしをささえるまちではたらく人びと」の知識の構造図

回数	学習内容	評 価			備 考
		感 覚	理 解	知 識	
1 (三組)	身近なところでつくられる野菜やくだもの	○			自分たちのまちで作られているクワイの生産について、興味・関心を持ち、意欲的に調べている。 発言 態度 ノート ワークシート
2	わたしたちの市でつくられるクワイ	○			クワイの作り方や働く人の工夫について話し合い、これから調べたことを整理し、計画メモに表現している。 発言 態度 ノート
2 (一組)	クワイづくりの1年①			○	農事暦からクワイ作りの仕事内容を読み取っている。 発言 態度 ノート
4 (二組)	クワイづくりの1年②	○			クワイ作りの仕事内容から疑問に思ったことを話し合い、見学して確かめたことを見学のしおりに整理している。 発言 態度 見学のしおり
3	守谷さんのクワイづくりの見学に行こう①		○		クワイ畑の様子について見学・調査して具体的に調べ、見学のしおりに整理している。 発言 態度 見学のしおり
	守谷さんのクワイづくりの見学に行こう②		○		守谷さんに質問したり、お話を聞いたことを通して、疑問を整理している。 発言 態度 見学のしおり
	おいしいクワイをたくさんつくるための工夫や努力①		○		クワイ畑を見学し、収穫の前までの仕事の様子から、農家の人々の工夫や努力について考え、適切に表現している。 発言 態度 ワークシート
4	おいしいクワイをたくさんつくるための工夫や努力②		○		収穫や出荷の様子から、農家の人々の工夫や努力について考え、適切に表現している。 発言 態度 ワークシート
	農協の見学をしよう①		○		農協の人に出荷されたクワイの収穫量や出荷先を質問し、見学のしおりに整理している。 発言 態度 ワークシート
10	クワイのたびをまとめよう		○		自分たちのまちで作られたクワイが国内の他地域に送られており、クワイを通じた他地域との結びつきをとらえている。 発言 態度 ノート
5	分かったことを手紙に書こう		○		クワイ作りの仕事をふまえて、ものを作る仕事の人々とわたしたちのくらしとのつながりについて考え、調べたことを表現している。 発言 態度 ノート 手紙

資料2 単元計画

もっと説得力のある説明ができるようにする意図が込められている。そして、複数の事実から一般化された命題を導き出す過程は子どもの思考が一層深くなるためのものである。そのように単元学習の大枠として計画される知識の構造図は単元と評価の計画でもっと具体化されて、提示される(資料1:3年「くらしをささえるまちではたらく人々」の知識の構造図,参照)。

(3) 単元の計画

本単元では、福山市曙町の子どもたちが日常生活で接することができる‘クワイ’を取り上げ、5つの段階を通じて子どもの学習を進めるように計画を立てている(資料2:単元計画,参照)。

5つの段階は、①出会う(クワイを利用し興味や関心の鼓吹,1/11)→②問題の決定(クワイ作りの事実分析と疑問提起,2~4/11)→③追求・交流Ⅰ(クワイ畑の見学,5~8/11)→④追求・交流Ⅱ(農協の見学,9~10/11)→⑤振り返り(学習のまとめ11/11)³⁾と構成されている。5段階は具体的な学習計画と同時に、子どもの理解や認識の構造化を示すものでもある。

福山市の特産物と福山ブランド農産物に関しては、すでに1学期に学習している。そのため11月に成された本単元の授業では、子どもが学校の通りすがりに見るクワイの様子や仕事を1年間にかけて把握することから始める。そのような地域と言う対象の知識を豊かにする段階を土台に、子どもは事実から疑問に思われることを解決するため生産や流通の場を見学する。見学の準備では、自分たちの疑問に対してクラス内でいろいろな話し合いが成される。そのコミュニケーションは見学の場では交渉相手の範囲を上げ、もっと拡大された思考を可能にする。それは、話し合いを通じて観念(概念)に発展させる集団思考にあたる。3年の場合には、集団思考は‘疑問→見学→まとめ・新たな疑問→見学→まとめ・新たな疑問’のような循環を繰り返す過程で利用されている。各クラスの本時の指導計画でも評価基準の1つとして‘発言’や‘態度’が言及されており、コミュニケーションを通じる思考の成長を強調していることが分かる。

(4) 第4時の指導計画:2組の4/11時間の授業を事例に

2組の4/11時間の授業は、単元の中で‘クワイ’に関する知識を豊かにする過程から生み出された‘疑問’を土台に見学の準備をするものである。

(a) 教授過程

—どのように教えるのか

地域学習の過程を通じて、知識を思考へ導くためには、まず単元に関して子どもがもっている知識水準又は認識を予め確認しておく必要がある。それ故、曙小学校では単元の指導前に記述式アンケートを実施し、その結果を基に各クラスの様子に合わせた授業を実践しようとした。ここで事例とする2組はクワイが曙町の有名な農産物であることや日常見るクワイの変化の様子に関しては多くの子供が知っていた。しかしながら、どのように有名であるか、値段や収穫の量や時期・仕方などを知っている子どもはほとんどいない。そのため、1年間のクワイ農事暦を利用す

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 規 準 評 価 方 法
1 前時のクワイの農事暦から分かったことを発表する。 ・2月ごろから土の準備をする。 ・7月ごろにえなを植える。 ・収穫は11月ごろ。	・クワイの農事暦を掲示し、前時に気づいたことをふり返らせる。	見学のしおり 発言・授業態度
2 めあてを確認する。 1年間の仕事の内容を見て、「なぜかな?」と思ったことを話し合い、見学のときにたしかめることをまとめよう。		
3 1年間の仕事の内容を見て、疑問に思ったことを話し合う。 ・クワイを冷蔵庫に入れておくのはなぜ? ・植え付けの1週間前にしろかきを行うのはなぜ? ・水の量を変えるのはなぜ? ・クワイはどのように育つのだろう。 ・どんな道具を使っているのだろう。	・仕事の内容とその時期との関係にも目を向けさせる。	
4 どうしてこのような仕事をするのか考え、予想を立てよう。 ・土を柔らかくして、植えやすくするためかな。 ・聞いてみないと分からない。	・予想がなかなか立てられない場合、それを見学の時に聞いてみようという意欲につなげられるようにする。	
5 見学に行って、観察することや働く人に聞いて確かめたいことをワークシートに整理する。	・疑問に思ったこと、もっと詳しく知りたいことについて、観察することと働く人に聞いてくることに分けて、見学のしおりにまとめさせる。	
6 まとめ 植え付けの1週間前にしろかきを行ったり、クワイを冷蔵庫に入れておいたりするわけを知りたい。		

資料3 第4時指導案

る学習（1～3時）から現状に関する知識を増やす。

4時間目である本時では、まず前時までの学習から「なぜ」と思われたことをクラス内で話し合う。そして、その過程で解決できないことやもっと詳しく知りたいことを中心に見学の時に調べるように計画を立てる。指導案では、それが1つの質問の形にまとめられて解決を追求する問題として残る。単純な流れの計画であるけれども、（地域に関する）知識－理解－思考につなげる段階性をはっきり示している。

（b）学習過程一どのように学習するのか

本時の学習において子どもに必要なものは、話し方と聞き方である。曙小学校で強調するコミュニケーションは、観念（概念）の交換ができる深い水準の会話で、それぞれ集団思考の本当の姿である。そのため、子どもは自分の意見を話すと同時に相手の意見にも耳を傾けて理解・比較・補充又は反論することを身に着けることが必要である。本時の学習ではクワイに関する知識を土台に「なぜ－だろう」の会話を通じて、「疑問→（見学）→まとめ・新たな疑問→（見学）→まとめ・新たな疑問」のサイクルを準備する。その過程は、主に子どものコミュニケーションから主導されるので、かなりの準備が要求される。もちろん、教授・学習の計画から学習の様相を予想することは限界があるだろう。それでも、1つ確かなものは地域を知るだけに止まる恐れは少なくなる。子ども同士の間に行われる話し合いは、互いの考えから「当然のこと」を改めて考えるきっかけになっており、その小さな疑問から自らの思考は深められる。

3 第5学年「工業の発達とわたしたちの暮らし～地域の工場見学から～」の場合

（1）単元の目標

ここで取り挙げる単元「工業の発達とわたしたちの暮らし～地域の工場見学から～」(曙小学校、2010)は、学習指導要領第5学年の内容(3)「様々な工業製品が国民生活を支えていること・我が国の各種の工業生産や工業地域の分布など・工業生産に従事している人々の工夫や努力、工業生産を支える貿易や運輸などの働き」を子どもたちに学習させようとする単元である。学習指導要領は、この内容では「我が国の工業生産について、・・・(中略)・・・それらは国民生活を支える重要な役割を果たしていること」(文部科学省2008、62)を考えさせるようにしている。さらには、第5学年の目標、特に、(2)「我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の

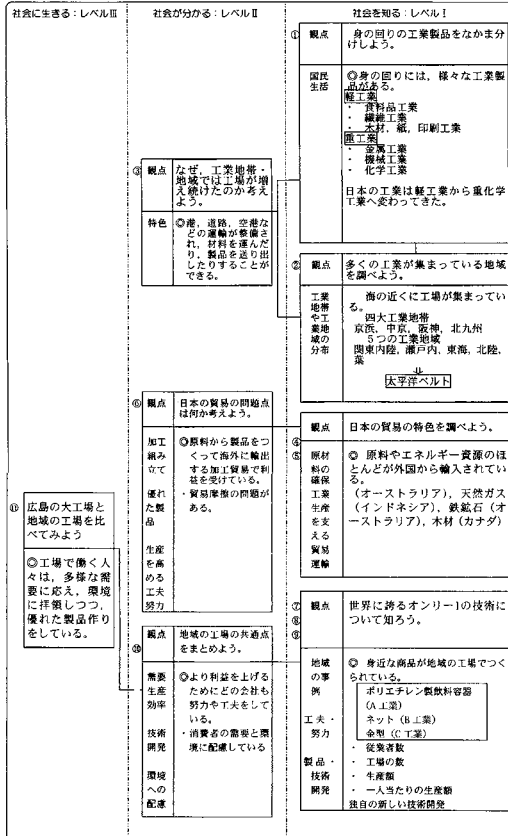
産業の発展や社会の情報化の進展に関心をもつようにする」(131)ことを目指すものである。

しかし、学習指導要領は、そのような学習を実現する具体的な道筋を示しているわけではない。「工業の盛んな地域の具体的事例を通して調べる」(64)として、教材は提示されているが、その教材の意味付けは各学校もしくは各教師に委ねられている。しかし実際には、工業の盛んな地域の具体的事例そのものを学習内容として学習を構成している場合が多い。結果として、学習は工業生産に従事している人々の工夫や努力そのものを知ることにとどまりがちである。子どもたちは、興味を持って工業に関する個別的な事柄を調査するものの、我が国の工業生産について考えることへとは向かわないということが、大きな課題となっている。

本単元は、そのような課題を解決するために、学習指導要領解説を参考にしながら、「工場で働く人々は、多様な需要に応え、環境に配慮しつつ、優れた製品作りをしている」という社会の見方を子どもたちが獲得する事を単元の中心的な目標にする。学習の目標として子どもたちに捉えさせたい社会の見方を確定することによって、子どもたちが、工業に関する個別的な事柄を知る事を超えて、我が国の工業について考えることができるようにしている。この目標のもとに、工業の盛んな地域の具体的事例として身近な地域の工場を選択し、主に「方法」の側面として取り扱う。身近な地域の工場を調査・探究することによって、身近な地域の工場を知るのではなく、その調査・探究を通して、一つの社会の見方をわかるようにするのである。しかし、そのためには、主体的な具体的な調査・探究を通して抽象的な社会の見方を獲得していく過程を子どもたちに保証しなくてはならない。本単元ではこれを可能にするために、知識の構造図、問題解決的な学習過程、集団思考、の3つのアイデアを使用する。

（2）知識の構造図とその役割

本単元は、子どもたちが一つの社会の見方を獲得するために、知識の構造図を用意している。それを示したものが資料4である。本単元の知識の構造図は、レベルⅠからⅢまでの3つの段階性が設定されている。最終段階のレベルⅢでは、「工場で働く人々は、多様な需要に応え、環境に配慮しつつ、優れた製品作りをしている」という単元の目標である社会の見方が、知識として示されている。この知識は、子どもたちが自分たちで調べることのできる具体的な事柄ではない。故に、このレベルⅢの知識は、工場の立地、加工貿易の仕組み、地域の工場の特徴というレベルⅡの知識の共通項として構造化され、そのレベルⅡの知識が、子どもたちが自分たちで調べることのできる具体的事柄



資料4 単元「工業の発達とわたしたちの暮らし」の知識の構造図

学習段階	観 点	学 習 内 容	発 見 促 進	評 価	
				評価規準	評価方法
I	国民生活 工業生産や工業地帯の分佈	身のまわりにある工業製品をなにかま分けしよう。 身の回りには、様々な工業製品がある。 ●身の回りには、様々な工業製品がある。 軽工業 ・ 資材品工業 ・ 繊維工業 ・ 木材、紙、印刷工業 重工業 ・ 金属工業 ・ 機械工業 ・ 化学工業 日本の工業は軽工業から重化学工業へ変わってきた。	○	身のまわりにある工業製品に関心を持っている。	身のまわりにある工業製品の仲間分けを重視する。 ノート にすることができ る。
I	工業地帯や工業地域の分佈	多くの工業が集まっている地域を調べよう。 海の近くに工場が集まっている。 四大工業地帯 京浜、中京、阪神、北九州 らる工業地域 関東内陸、瀬戸内、東海、北陸、東 北 太平洋ベルト	○	工業地帯・工業地域の特色をとらえている。	それぞれの工業地域・工業地帯の特色を言うことができる。 発言 ノート
II	生産性を高めるための工夫	なぜ、工業地帯・地域で工場が増え続けたのか考えよう。 ●能、道路、空港などの運輸が整備され、材料を運んだり出したりすることができ る。	○	工場が集まっている地域を比べ、工業の発達する要因を考えよう。	能・高速道路、工業用地・労働力などの要因を見つけている。 発言 ノート
I 2	原材料の確保 工業生産を支える貿易や運輸	原料やエネルギー資源のほとんどが外国から輸入されている。 (オーストラリア)、天然ガス(インドネシア)、鉄鉱石(オーストラリア)、木材(カナダ)		日本の貿易の特色を調べよう。	日本の貿易についての特色が分かり、工業生産と結び付けて考えている。 発言 ノート
II	加工組み立て で 作られた製品	日本の貿易の特色を調べよう。 ●原料から製品をつくる加工段階で利益を受けている。 ・貿易摩擦の問題がある。	○	日本の貿易の特點は何か考えよう。	輸出が輸入を上回ることに ついて問題を見つ けらるしと関連付けて 考えている。 発言 ノート
I 3	地域の事例 工夫・努力 製品開発・技術開発	世界に誇るオンリー1の技術について知ろう。 ●身近な商品が地域の工場で作られている。 ポリエチレン製飲料容器 (A工業) ネット(B工業) 金型(C工業)	○	地域の工場がどんな工夫や努力をしているか調べている。	生産者数や生産額、独自の技術開発についてまとめることができる。 発言
II 3	必要生産効率 技術開発 環境への配慮	地域の工場の共通点をまとめよう。 ●より利益を上げるためにどの会社も努力や工夫をしている。 ・消費者の需要と環境に配慮している	○	地域の工場を比べ、工業の特色や工夫をまとめよう。	集めた製品を生産するために様々な工夫や努力をしていることを具体的に説明することができる。 発言 ノート 観察 質問
III	国民生活	広島の大きな工場と地域の工場を比べてみよう ●工場で働く人々は、多様な需要に応え、環境にやさしい製品を作っている。	○	広島の大きな工場と地域の工場を比べてみよう。	工場で働く人々は、多様な需要に応え、環境にやさしい製品を作っていることを考えている。 発言 観察 ノート

資料5 単元計画

であるレベルⅠの共通項として構造化されている。このように知識を段階的に構造化することによって、子どもたちが自分たちの知識の共通項を見つけていけば、‘工場で働く人々は、多様な需要に応え、環境に配慮しつつ、優れた製品作りをしている’という一つの社会の見方を獲得できるのである。

(3) 単元の計画

本単元の計画（資料5，参照）は社会の見方の獲得を子どもたちの主体的な学習によって実現するために問題解決的な学習過程を構成する。本計画は3つのパートから構成されている。すなわち、工場の立地を知るパート，加工貿易の仕組みを知るパート，地域の工場の特徴を知るパートである。それぞれのパートは、なぜある地域では工場が増え続けたのか，日本はエネルギー資源を多く輸入しているのはなぜか，地域の工場の共通点は何か，という学習問題を子どもたちに見つけさせる学習から，それを実際に解決する学習へと進む。その中で，子どもたちが工場の立地，加工貿易の仕組み，地域の工場の特徴を知る。つまり，3つのパートは，それぞれの知識の構造図における，レベル

Ⅱの知識の獲得と対応している。そこでは，知識の構造図に組み込まれた知識を問うような学習問題を子どもたちが発見することによって，その解決としての知識の獲得過程が子どもたちの主体的な学習となる。

また本計画は，3つのパートを通し，問題解決的な学習過程を構成することにより，工業に関する1つの見方を獲得させる。我が国の工業について知識を主体的な学習によって獲得させるために，我が国の工業とはどのようなものであるか，を大きな学習問題として，その問題を発見，そして解決する過程として計画は構成されようとしている。しかし，本計画では，3つのパートの間で発展していく問題がはっきりしない。そのため，子どもたちには3つのパートの学習がそれぞれ別の問題設定のように感じられるかもしれない。そうすると，我が国の工業とはどのようなものであるか，という学習問題を自分たちの日常生活との関わりの中で現れた問題として捉えられないかもしれない。そこで，3つのパートにおいて問題が関連していく構成にするためには，3つのパートをそれぞれ問題解決の中からの新たな問題発見の過程として構成するための問

いははっきりさせる必要があるだろう。たとえば，‘身の回りにある工業製品の多くは，効率化された大工場が作っている，しかし，効率化の面で不利である中小工場でも利益を挙げられる共通点とは何なのだろうか’や，‘多様な需要に応え，環境に配慮しつつ，優れた製品作りをしている我が国の工業生産はどのような問題を抱えているだろうか’というような問題を発展させる問いと共に単元が計画されることによって，そのような学習問題を子どもたちが発展させ工業に関する1つの見方を主体的に獲得するように，構成することができるだろう。

(4) 第10時の指導計画

本単元の各授業は，集団思考の方法が用いられている。ここでは，第10時の授業（資料6，参照）を事例にこれを見ていこう。本時の目標は，地域の工場についての思考を

学習活動	指導上の留意点	評価方法
<p>1. 学習問題を確認する。</p> <p>地域の工場の特徴や工夫をまとめよう。</p> <p>2. 3つのグループの発表を聞く。 日東製綱・フカ工特殊鋼・備南工業で作っている製品や技術などを発表する。</p> <p>「日東製綱」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特許を持った技術を持っている。 ・ 色々なネット製品を作っている。 ・ 綱を作る業界の生産高・売上一番の工場である。 <p>「フカ工特殊鋼」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特許を持った技術を持っている。 ・ いろいろな形の金属加工ができる。 ・ お客様の注文にもっとも早く応えられる工場である。 ・ 機械に使う油は再利用される。 <p>「備南工業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特許を持った技術を持っている。 ・ 色々な形の製品を作っている。 ・ 子どもがたくさんいる国に進出している。 ・ 燃やしても有害ガスの出ない容器の開発をしている。 <p>3. 3つの工場の共通点を見つける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どの工場も，自分たち独自の技術をもっている。 ・ どの工場も，お客様の要求に応じている。 ・ どの工場も，短い時間でたくさん生産できるように工夫をしている。 ・ どの工場も，環境にやさしい製品を開発している。 <p>4. 学習をふり返りまとめをする。</p> <p>どこの会社も人がほしいものを作っている。技術を開発し，生産を工夫している。環境に配慮している。</p>	<p>◇前時に作った各グループの新聞をもとに発表させる。</p> <p>◆会社独自の工夫，お客様の要求，作業時間を短くする工夫，環境への配慮の4つの観点を与え，アンダーラインで色分けさせる。</p> <p>☆発表の際は資料のどこを見ればその考えができるのか分かるように理由付けさせる。また，良い発言方法を認めていく。</p> <p>◇共通点をまとめ，学習問題に対する自分の考えや分かったことをまとめさせる。</p>	<p>・ 発表</p> <p>・ ワークシート</p> <p>・ 発言</p> <p>共通点を発見している。</p> <p>・ ワークシート</p> <p>・ 発言</p>

資料6 第10時指導案

深めることであり、知識の段階性で言えば、見学した各工場の特徴や工夫というレベルⅠの知識を基に、地域の工場の共通点というレベルⅡの知識を獲得することである。そのために、本時は、①子どもたちに、地域の工場を見学した体験から各工場の特徴・工夫を発表させ、互いに聞かせる、②子どもたちに各工場の特徴・工夫を4つの観点から分類し、共通点を見つけさせ、見つけたことを発表させ、互いに聞かせる、③子どもたちに地域の工場の特徴・工夫に関する個人の考えをまとめさせる、の順で進んでいく。

a) 学習過程—どのように学ぶのか

授業過程を見ればわかるように、本時は、子どもたちが集団で思考することによって、仲間の思考から自分に無かった気づきや考えを発見し、それを受け入れることによって、思考が深まるようになっていく。①の過程では集団思考による思考の深まりによって、見学した各工場の特徴や工夫という知識を子どもたちが共有するようになる。その後②の過程では、共有した知識を基にして、さらに集団で思考することによって、地域の工場の共通点という知識を発見する。最後に③の過程で、地域の工場の共通点を自ら説明することで、発見したことを自らの知識として確定する。

b) 教授過程—どのように教えるのか

一方、教師は子どもたちの発見を促進する役割である。そのためには、子どもたちの発見のつまずきを予想しておく必要がある。本時で、特に注意が必要なのは、子どもたちが調べたレベルⅠの知識の共通項としてレベルⅡの知識を発見する場面である。地域の工場の共通点というレベルⅡの知識を発見するためには、見学した各工場の特徴や工夫というレベルⅠの知識を整理して共通項を見つけ出さなくてはならない。つまり、観念的な操作が必要になり、子どもがつまずいてしまう可能性が高い。本時では、このつまずきを乗り越えるために、各工場の特徴・工夫を4つの観点によって色分けするという活動を準備する。これによって、観念的な操作を視覚的に理解することができ、仲間の思考を理解しやすくなる。本時の学習を進ませるには、子どもたちが、仲間の思考から、自分に無かった気づきや考えを発見しやすくなるしかない。そのために、“考え方の根拠、事実を出し合い、確かめ合いながら”集団で思考することを指導する。

本単元では、このように集団で思考することを通して、より多くの子どもたちの発見を引き出し、生徒の思考の深まりを保証しようとしているのである。

(5) 小括

学習指導要領はこの内容の学習で、子どもたちが我が国の工業生産についての理解を深めることを、さら

には、国民生産との関連の中で、産業を展望できるようにすることを目指しているが、それが達成できていない場合が多い。本単元は、目標として一つの社会の見方を明確に設定し、知識の構造図、問題解決的な学習過程、集団思考を使うことによって、工業に関する一つの見方を、教室の中のより多くの子どもたちに獲得させる事を可能にしていた。これは工業生産に従事している人々の工夫や努力そのものを知る事にとどまる学習を乗り越えた大きな成果である。しかし、この内容の学習は、本来、国民生産との関連の中で、産業を展望できるようになる事までも目指す学習である。そのためには、工業に関する社会の見方を獲得した思考を他の産業にも応用させる力が必要であるだろうし、さらには、一つの社会の見方に対して、別の社会の見方を見つけ出すような力が必要である。そのように考えるなら、本単元の示している可能性をも乗り越えて、さらなる可能性を模索する必要があるだろう。

大きな課題も残されている。曙小学校の社会科授業づくりの基本方略は、知識の構造図の構成である。この知識の構造図づくりにおいて、問題を抱えている。それは、各知識を適切なレベルに配置し、そのレベル上昇を保証することがむずかしいことである。たとえば、「四大工業地帯」の位置は、子どもたちが地図帳を調べて見つけることのできる具体的事実的知識である。一方、「海の近くに工場が集まっている」という一般化された知識は、なにかしらの一般化が行われないと子どもたちが持つことのない知識である。これらは本来別のレベルに置かれるべき知識であるが、本単元の知識の構造図では、これらが同じレベルに位置づけられている。同じことがレベルⅡとレベルⅢの間でも起こっている。構造図に組み込む知識は、それより一つ下位のレベルの知識から直接導かれる知識として設定されなければならない。そうでなければ、知識のつながりは保証されず、より上位の知識の獲得は保証されないものになってしまう。ここには改善の余地があるとと言えるだろう。

4 曙小学校の社会科授業づくりの原理と特質

学習指導要領には、その単元の目標を示している。たとえば、5年では、国民生活を支えていること、産業と国民生活との関連の把握を目指している。しかし往々にして、我が国の各種の工業生産や工業地域の分布、工業生産に従事している人々の工夫や努力に終始してしまい、目標達成がむずかしい。この教育課題を曙小学校は、知識の構造図と、社会の見方や考え方の

設定、問題解決学習、集団思考で解決しようとしている。

福山市立曙小学校はこのような教育課題の解決において、3つの基本方略を設定している。

第一は、より高い知識を学習できるように、知識の構造図を作成することである。第二は、質の高い知識の学習を意識するために、社会の見方や考え方を設定することである。第三は、高い質へ子どもたちの学習が移ることを集団思考の活用によって保障しようとしていることである。これらの点をうまく利用して、曙小学校において社会科授業づくりを進めている。

基本方略が十分働いているかと言えば、そうとは言えない。知識の構造図の書き方、またその活用の仕方に問題を抱えている。しかしながら、地域教材を活用し、知識の構造図を用いて、質の高い社会科授業づくりを進めていることは評価すべきことである。

【参考文献】

- 上田薫・静岡市立安東小学校編『子どもも人間であることを保証せよ一個に迫る座席表指導案-』明治図書1988.
- 全国社会科教育学会編『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書, 2001.
- 福山市立曙小学校, 『研究紀要』2003.
- 福山市立曙小学校, 『研究紀要』2007.
- 福山市立曙小学校, 『研究紀要』2009.
- 福山市立曙小学校, 『研究紀要』2011.
- 藤岡信勝編著『個を育てる築地学級の秘密』学事出版, 1990.
- 武藤文夫『安東小学校の実践に学ぶーカルテと座席表の22年ー』黎明書房, 1989.
- 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, 1978.
- 森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書, 1984.
- 文部科学省(2008), 小学校学習指要領解説社会科編

【謝 辞】

本研究は、福山市立曙小学校の校長 平盛幸宏先生をはじめとする教職員の皆様のご協力とご支援によって進めることができました。ここに記して感謝申し上げます。